

音聲と婦人の氣質

樂 天 子

亞米利加の一俳優は、多年の間、觀察實驗したる所に基きて、音聲によりて婦人の氣質を知るを得ると斷言したり。是れ決して據り所なき言にあらざるなり。又或人は「婦人の柔軟なる音聲は、美なる心を惹起す」と言ひき。是もまた信するに足る、他に代りて自己を犠牲にするの用意あることき、純潔なる感情を有する婦人の音聲は、大概明瞭に又溫柔にして甚だ柔かなるものなり。音調低くして、よく對話者の心を鎮むることき音聲を有する婦人は、利己心に富めるを常とす。

若し耻辱を受くる場合は、強く復讐の心を起すの傾あり。されど常に正直に又公明正大に行をなすの美質を有す、かくのごとき婦人は、通常伶俐にして、又才能ありて美術の趣味を有す、音調なく又粗野にして強く低き音聲は、概ね快活にして率直の性質を有す。されど此の如き性質を有するもの

は、常に正義を旨とするより、往々急劇殘酷なるに過ぎて、目的する所と全く反對の結果に達するを常とす。

蓋し此の如き婦人は、婦人の服裝したる男子に外ならざるなり、然れども多くは感情に制せらるること稀にして、意志の力甚だ強きを以て、日夜女權の擴張に苦慮し、又時により變に應じて、驚くべき企圖をなすことあり、而して此の如き音聲を有するものは、智力感情共に乏しきを常とす。高く強く俗に云ふ「ヒナリ聲」を有する婦人は、必ず權利を振り過ぎ、妻としては「オテンバ」主婦としては、下婢を此り付け、母としては小言多し、最も恐るべき婦人は、屢々音聲の變するものなり。高く響く聲がやがて低くなり、又不満足なる調子となり、少しく怒れば劈く如き聲となりて、其年若き間は男子の愛を得るも、其容色衰ふるに及びては、其夫の心を慰むべき美質なしといふ。

